

Tsunagu

45th

繋ぐ 全員で、
全力で。

conversation

青少年とは
チームワークの心掛けとは
子供たちとの接し方とは
育て方&ビジョンの立て方の極意



対談

石岡第一高等学校 野球部監督 川井政平
石岡青年会議所 理事長 大塚良幸

特別対談第三弾

川井政平 × 大塚良幸

石岡第一高等学校 野球部監督

石岡 JC 第45代理事長

祝 第91回選抜高等学校野球大会
甲子園初出場記念





石岡第一高等学校野球部川井監督と大塚理事長との対談 石岡第一高等学校内小講義室編

青少年とは

大塚理事長（以下、大塚）

まずは、石岡一高、第91回春の選抜高校野球大会甲子園出場、誠に
おめでとございます。

石岡市としても非常に盛り上がってまして石岡一高が甲子園に行くつ
ていう事が本当に僕の中でも夢のようなところがあります。是非、夢
の舞台甲子園で石一旋風を巻き起こし、地域を盛り上げていただきた
いと思います。また、甲子園で石岡一高らしい野球をしていただくこ
とや選手の頑張りを私達も元気づけられることもありますの

で、是非とも頑張っていたきたいと思います。そして、私たち青年
会議所はまちづくり事業や青少年育成など通して人と人との繋がり
の中で成長していくというものだとは感じております。本年は大人と
子供の両隣間の成長を促す事業を考えておりまして川井監督にも伺
いしたいのですが子供たちと触れ合う中で青少年のお考えをお持ちな
のかお聞かせ願えればと思います。

川井監督（以下、川井）生徒というのは特に我々が多く携わる年齢と
いうのは16歳、17歳、18歳で小学生よりはちょっと大人、かとい
つて大人と言っても20代過ぎて30代過ぎてということはないです
から見た目は大人ですが心の中はまだ子供なので、それを理解して子供
たちと接することが一番大切だと思います。高校生は子供らしさが無
いと駄目だと思っし自分たちもそうですが子供の時期に失敗が多いの
でその失敗に対し指導したり叱ったりする必要もあるかもしれませ
んが、それよりも失敗に対して次にどうチャレンジしてその失敗を次
にどう生かすか、という事を念頭に置いて子供達と接しております。子
供たちはまだまだ未熟なんだと、我々も含めてですがお互いに成長し
ているもんだという考えで生徒と接しているという事が自分の中であ
りますね。

大塚 大人になると出来るだけ失敗がたくないということから挑戦
する機会が少なくなってくると思います。
石岡青年会議所のスローガンの中にある、本気で挑戦するっていうフ
レーズを入れさせていたいたのは挑戦することに意味があり、全員
が全力ですなわ本気で向き合う事、20歳から40歳までに今後を
見越して、失敗を恐れず挑戦していく事が大切だと思っております。
川井監督のように熱く生徒に向き合ってくれる先生は近年少なくなっ
てきているので、今後ともお指導していただければと思います。
それでは対談2に移させていただきます。

チームワークの心掛けとは

大塚 先ほどお話にありましたニュースで石岡一高が甲子園出場とい
う事を聞き驚きました。前の段階で話は聞いており、決まるであらう
と思いましたが校長先生からの電話を受け取った時に改めて感激いた
しました。やはり、野球はチームワークが凄く大切だと思います。我々
青年会議所も31人のメンバーで活動していますがチームワークは組
織としての力に繋がりに必要になってくると思います。

川井 そうですね。全員で46人マネージャー合わせて49人、49
分の1だとチームが成り立たないので誰もが監督で、キャプテンで、
という気持ちで植え付けて、そういう気持ちでチームを運営してもら

いたいという気持ちがあります。その為にはどのようにするかというと、一人一人自分がやりがいいの持てる事、自分が成長してるんだ、自分がチームに貢献してるんだ、という機会を出来るだけ多くの生徒に与え、そうすることによって自分が成長している気持ち、あるいはやりがいがあると次はこうしてみよう、次はもうちょっとこうしてみようと、そういう芽がいつは出来て一人一人が監督の気持ちやキャプテンの気持ちになれた事が一番だと思います。

もう一つは競争という言葉を使わず共存、共栄という言葉を使い実行してもらっていますね。

成長段階で心の成長、野球の技術の成長そういったのが46人居たら46人違うのでこの子がどのくらい伸びているか？じゃあこのくらいの力の子がどのくらい伸びているか？なるべくオンラインで見てあげるといいか、その子が3年間の中で伸びてくる要素なのかと思います。あとは教えあう事ですね、指摘し合うというよりは、自分の短所と長所をさらけ出して周りがそれに対してもうちょっとこうした方が良いんじゃない、逆に良いところは褒めて褒める事、短所を補い合う事、教えあう事をチームの中で場面をつかってやってる事が監督から見てチームワークが良くなっている事かなと思います。

大塚 同じ想いを共有することっていいですね。

川井 そうですね。お互いに助け合うという事ですかね。お互いに成長を競ってどっちかを落とすのではなく相手を引き上げることによって、自分ももっと頑張らなくてはならない、相手を引き上げることによって自分が成長しなくてはならない、相手を引き上げる状況をつくるってことが、お互いに成長していくという形ですかね。

大塚 当事者意識と言いますが、一人ひとりがキャプテンだということというの、まちづくりも同じだと思います。目立ったまちの有識者や行政がやるのではなく、一人ひとりが自分の地域だと思い当事者意識を持って地域のことを考えることが非常に必要だと思います。私たち青年会議所も同じで一人ひとりが色々な事業をやるに当たって皆がその事業に向き合えるように一人ひとりが自分事と捉え運動する事がこの地域をより良くする事が出来るのだと思います。まさにチームワークに関しても、監督が仰ったチームワークは皆がトップの気持ちでやる事で一人ひとりの思いが共有して、組織としてのチームワークを創っていくという事がわかりました。

今後、是非青年会議所に使わせていただこうと思います。

川井 青年会議所に入ってるってしゃる時点で何かをしようという志が、皆さん凄いなからその時点で一歩踏み出していますよね！そこはやっぱり凄いなと思います。

大塚 入会時からまちづくりをしようと思うメンバーも居ますけども、高い志を持って入会するメンバーはなかなか少なく、やはり、

仲間の輪を広げたい、仲間の繋がりを強めたいというのが正直なところだと思います。入会して青年会議所運動を色々やっていく中で自分たちの地域はどんな問題があるのか？ここをこうした方がもっと良くなるんじゃないか？徐々に気付いていく事で地域の為に何かをしていけるんだ！という行動をしていく事が自分たちの成長に繋がると思えます。私たち青年会議所は40歳までですが、青年会議所を卒業してからも本場の勝負だと思っており、ここで培ったものを卒業してからの域の為にもしっかりと力強くリーダーシップをとって動かしていきたいと思っております。

長々とすみませんでした。



子供たちとの接し方とは

大塚 続きまして第3テーマになります。私たちの組織の中にも青少年の育成を軸とした青少年育成委員会あり、3月6日の水曜日に事業を考えております。その内容は「共に育む教育のススメ大人が育てば子供が育つ」と題しまして親学のアドバイザーの講師を遠方からお招きしまして、親や地域の大人と子供達の関わりについて学ぶセミナーを考えております。子供たちが大人たちの姿に規範となって子供と大人が共に育つてゆく、そういった社会になって欲しいと常々思っております。

川井監督が子供たちに接するとき心がけていることがあれば聞かせていただきたいと思います。

川井 まずは私自信とすれば、やはり嘘はつかないって事です。あとは言葉という対話を重視して多くの言葉を投げかけ接する事により子供たちが変わってくることもあり、あとは褒める事、教える事、やらしてみる事。そういった事をサイクルとして多く心掛けております。そうする事によって失敗も出てくるし成功も出てくる、そうした時にその失敗に対してアドバイスをしてあげる、あるいは成功した時に褒めてあげる。

そうすると次は自分でこうしてみようとか、今度は主体性っていうのが出来るのです。最終的には主体性を持って何か物事を自分で進めるように持っていくようにする事が一番の目的と言えます。ね、野球を教えるというよりは野球はツールであって最終的には主体性を育んだり挫折してももう一度起き上がるというような前向きに物事を捉えられるように考えられるようにしたりとか、あるいは自分で相違工夫して想像力を高められるようにしたりとか、そういう所を一番の主眼だと思えます。自分自身、若いときは勝ちたい勝たいたいという欲がありましたね。以前のような欲っていうのは最近無くて、欲っていうのは一過性なんです。

欲は一過性ですけど理想と哲学っていうものはずっと長いスパンで物事を考えられるので、青年会議所の皆さんは理想という夢とかというものをもちながら多分、この青年会議所をイメージされると思うんですよ。何かの欲でこうなりたいから、何かの欲であらなりたいからという、どうしても一過性のようなもので皆がバラバラになっちゃうというのが野球部では特に多いので、理想と夢というものに対して前に進んで行けるような気持ちを持って接していかないと。その為にはさっきも言いましたが褒める事、そして何も分からないのに

やってみなさいという訳にはいかなないので教える事、教えた後に評価をしてあげる事、そして検証する事、評価をすることによって次はまたどんな風にやろうかという相違工夫が生まれてくる。

そのような入バイラルを上手くやるうとして感じですかね。

教えると言っても全く知らないことは教えるんですよ、だけど、ある程度教えると想像すれば出来る事っていうのがあると思うんですよね。想像すれば出来ることも教えちゃうと今度想像力がなくなってしまうので、ある程度基盤を教えて、それ以降は想像力を働かして、練習メニューなんかあんまり言わないで自分達で決めさせたりもして、そうする事によって自分達でコーチアップ見たり練習の内容をブ口野球キャンプではどういう練習をやっているのか、自分達で情報を入れて教えたことのないような練習をやってみたりするんですよ。

「良い練習やっているな」と言おうように褒めると、「コーチアップ見たんです」と、「それスゲーな」というとか情報を集めてくることで、練習メニューが増えてくるというサイクルで上手くやっていけたらいいなあと思ってますね。

育て方&ビジョンの立て方の極意

大塚 私も高校の時には監督からこれやりなさいと、やらされた感ほ正直のところありました。そこで一歩もつと自分をこうしたいという理想があれば、より主体的に物事を感じ取れたのかなと思います。それが気付けたのも野球というツールがあったからだと思います。

それでは、最後の対話になります甲子園を目指す事がビジョンではないと思いますが、その先には子供として、地域としてのビジョンを確りと意識を持っていければ自ずと意味のある行動に移せると思います。そして、掲げたビジョンを達成できると思っております。川井監督が現在子供たちに何かこうして欲しいというビジョンなどがありましたら、お聞かせ願えればと思います。

川井 そうですね。私の中での話ですが、こうして欲しいというよりは、こうなって欲しいという想いがありますね。自分自身も全然完成された人間じゃないので高校3年間で全て教えられるわけではありませぬ。

多くの人は理想の自分と現実の自分と追いかけてこしながら生きていと思うんですよ。だけどその時にどっかでじゃーいいやとかね、どっかで無理とかね、そういう挫折なんかもあると思うんです、その時に新たな夢っていうか次の新しい目標が作れるという事は、自分自身に夢や目標がないと、夢と目標が持てないと思うので、そういった事を大事にしながら夢や目標をずっくと大人になり続けても持って



時には気持ちが折れたりとしても、そういう所の3年間が点になっていると思うんです、必ずね。その点をちよつと思ひ出して、あつ！あの時俺こうだったなと、もう一回頑張ってみようとか、夢や目標を生涯持ち続けられるようになって欲しいという事が一つですね。

あとは何かやるにしても自分でこうやってみようという主体性ですかね、あーいう事やってみよう、こういう事やってみようという主体性をもって物事に取り組めると何をやるにしてもフットワークが軽くなるのかね、あるいはおっくうでなくなったり、あるいは重宝がられるなど、そういういった所があると思うんですよ。そういうところ

をずつと書き続けられれば、最終的に自分で出来なかった事や自分だけでは成し遂げられなかった事でも青年会議所さんの様に繋ぐっていう形で最終的にはこうなったから人を呼ぶんじゃないかと、最終的には人が成長して人が人を呼ぶという形になると思うんですよ。そういう意味では夢を持って目標を持ってバイタリティー溢れる人間に徐々になってくればと思ってます。急に40歳の考えっていうのは持てないと思うので20歳なりの25歳なりの30歳なりのものを持っていれば良いと思います。また生涯持ち続けられるような成長をしてもらいたいという風に思っています。3年間というわずかな点なんですけど我々がやっている仕事は大事だと感じます。

大塚 限られた時間の中でぎゅつと吸収し、野球というツールの中で気付かされたり、気付いたり、子供たちにとつて凄く貴重な機会だと思えます。夢や目標を持つという事はなかなか薄れてきてしまうこともあるのですが、夢や目標を持つ事でしっかり行動に移せるようになるかと思えます。今後監督に教わったことをしっかりと受け止めて改めて子供たちと一緒にこの地域を私たち大人も一緒に成長できるようにそんな運動をしていきたいと思えます。

本日の対談は以上となりますが、本当に貴重なお時間を頂戴し、誠に有難うございました。

甲子園では、ハツラツとした高校球児らしい、また、石岡一高らしい姿を見せていただき、あの夢の大舞台で選手全員と川井監督さんの多くの笑顔を楽しみにしております。

川井 ははははは。頑張りませぬ！

大塚 思いますので、是非頑張ってくださいと思います。本日はどうもありがとうございました。

川井 有難うございました。

大塚 有難うございました。





石岡第一高等学校
大和田校長先生

SYOUHEY KAWAI

1974年茨城県生まれ。県立竜ヶ崎第一高等学校卒業、國學院大学卒業。竜ヶ崎第一高校時代2度甲子園に出場。松井秀喜（石川・星稜）とも対戦した。99年に波崎柳川高校の監督に就任。05年の夏の大会では決勝に進出。09年より石岡第一高校監督に就任。19年石岡第一高等学校初の甲子園に導く。

YOSHIYUKI OTSUKA

1979年茨城県生まれ。土浦第三高等学校卒業、東京自動車専門学校卒業。ブリヂストン株式会社茨城カンパニー、有限会社タイヤセンターオオツカ店長。2007年石岡JCに入会し、12年委員長13年副理事長を務める。17年専務理事、18年茨城ブロック議長を経て、19年理事長就任

NEXT conversation

特別対談第四弾

元マザーテレサの付き人と特別対談

枝見 太郎 × 大塚良幸

財団法人富士福祉事業団 理事長

石岡 JC 第45代理事長



第48回

茨城ブロック大会 石岡大会



SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

世界を変えるための17の目標

